山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

第41号
令和5年7月20日

山口県立大学
郷土文学資料センターだより

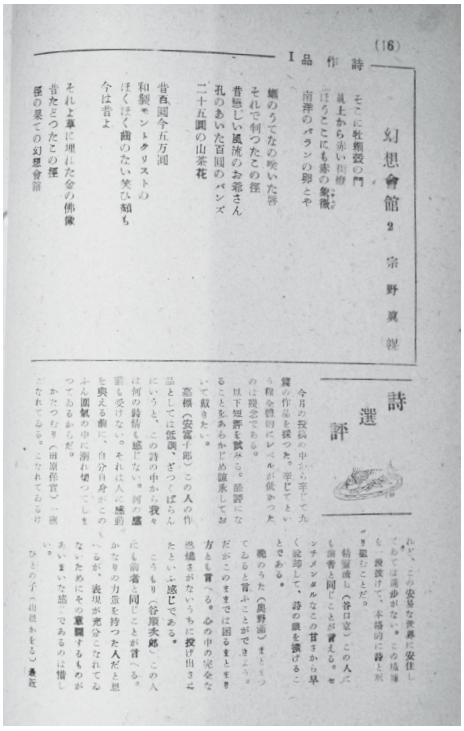
『文芸風土』に寄稿した詩人たち

中　原　　豊（中原中也記念館・館長）

『防長文学』『山口県文学』の後継誌である文芸誌『文芸風土』は、1945年から49年にかけての戦後復興期の山口県における地方文壇の様相を如実に示しているが、本稿ではその中でも寄稿した詩人たちに注目してみたい。

山口県立山口図書館、萩市立萩図書館に所蔵されている『文芸風土』全38冊および附録を通観すると、掲載された詩は755篇、寄稿した詩人は196人に上る。投稿者の所在地は山口県内ばかりでなく、福岡県、広島県といった隣接県から、九州では大分、長崎、佐世保、鹿児島、本州では島根、大阪、東京などに広がっており、西日本レベルで見てもある程度有力な雑誌であったことがわかる。

日常生活のみならず、経済活動全般、とりわけ印刷製本をめぐる状況が徐々に好転していたことを背景として、編集同人や一般投稿者の創作活動が活発になっていった様子がうかがえるが、第5巻第7号（1948年9月号）の巻頭に掲げられた「文芸風土の新進路とサークル活動について」が示しているように、個々の営みが文化活動として組織化されていった様子が見えるのも戦後ならではということができるだろう。誌面を見ると、編集同人ら有力な詩人たちの作品が掲載される「詩作品1」と、選考を経て掲載される「詩作品2」に分けられているが、多くは後者の掲載作品についての選評が付されており、一般投稿者の研鑽の場として機能していたことがうかがえる。


（16）
詩作品 I
幻想會館 2　宗野眞幌
詩選評

第４巻第８号（1947年11月）
「詩作品Ⅰ」と選評の掲載頁

寄稿した詩人たちの顔ぶれを見てみると、『防長文学』『山口県文学』さらに遡れば『詩園』以来となる、和田健、村田富久太、中原呉郎、林かほる、小泉喜代一といったメンバーが、寄稿だけでなく編集や選考といった役割を果たしていたことがわかる。そうした中で『文芸風土』時代に頭角を現したのが礒永秀雄や宗野真幌である。礒永は多くの詩や評論を発表した他、1948年に刊行した詩集『天路への誘ひ』が第5巻第3号（同年4月）で小特集を組まれるなど、高く評価された。宗野は「幻想会館」などの連作詩で独自の世界を展開し、評論でも異彩を放った。いずれも『文芸風土』の中心的な存在になっていった点で注目される。

一方で、選考を経て作品が掲載される一般投稿者の中にも、息長く詩作を続けた市井の詩人がいる。荒川孝子、直木田伸、中井芳穂、なかつえまつよ、中山芙瑳らは、上記の主要メンバーと並んで作品が掲載されることのある有力な投稿者である。『防長文学』『山口県文学』時代にはいわゆる愛国詩、戦争詩を寄稿していた彼らが、戦後、どのような詩を書いたか。例えば、荒川孝子は病身の夫を看護する妻の思いをひたむきに綴る（「よろこび」「朝の病室」他）。中山芙瑳は、学徒出陣して生還した元兵士の〈ふるさとは恋しかつたがしかし／内地の風は冷たい〉という言葉を紹介し、〈しろじろとした反省が／今日もわたしの心をよぎる〉と結ぶ（「反省」）。こうした詩人たちの作品にも、詩作という営為の意味を考えさせる契機が潜んでいて看過できない。

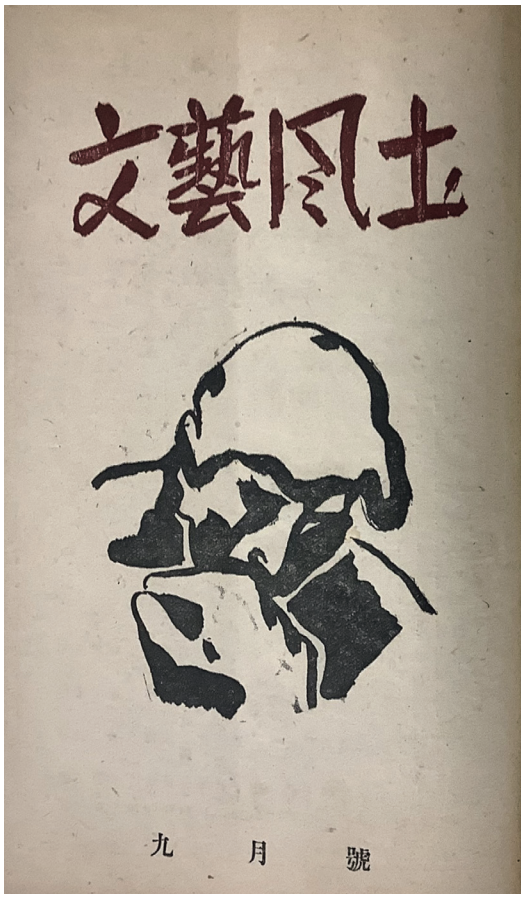
編集者小林照夫と『文芸風土』について

加　藤　禎　行（郷土文学資料センター・センター長）

『山口県文学』の終刊と『文芸風土』の発刊を、新聞記事「県文報解散　今後は″文芸風土″で活動」（『防長新聞』一九四五〈昭和20〉年一〇月一二日）は以下のように伝えている。「県文報は七日役員会を招集して正式解散を決定、同時に今後の文学活動について打合せを行つた、したがつて県文学報国会は近く発送される雑誌『山口県文学』をもつて一応解散新発足するが、今後は雑誌『文芸風土』を中心とする文学グループの形で運動を継続することになつてをり誌友、準同人、同人の三制度で団結し、同人の中から別に山口市在住の中堅をもつて編輯同人を組織、直接雑誌編輯を担当させるほか誌友五名以上の地方には支部を設置することになつてゐる、なほ会費は誌友費一ヶ年十円、半ヶ年五円であるが同人は別に一ヶ年十円を負担区域も従来のやうに県下のみを限らず広く西日本一帯に呼びかける」。

雑誌『文芸風土』発刊号は「昭和二十年十一月一日発行」と奥付に記載され、巻号は『山口県文学』を引き継ぎ第二巻第十号とされた。奥付には編輯人小林照夫、発行印刷人村田公亮、発行所は、山口県出版株式会社から名称を改めた西日本出版株式会社とある。小林照夫は『関門日報』を退社後、村田公亮経営の山口県出版株式会社に入社し、同社の雑誌編集に従事した編集者だ。やがて西日本出版株式会社の解散に伴って、一九四七〈昭和22〉年九月から発行所は文芸風土発行所となり編輯発行人が小林照夫となった。そして終刊号となる一九四九〈昭和24〉年九月一日号まで全三十八冊が刊行されたと思われる。

原田種夫『西日本文壇史』（一九五八〈昭和33〉年三月、文画堂）は、「編集者小林照夫は、いまも、第二の吉田常夏ともいうべき山口市の文学運動の功労者といわれている。」と述べ、雑誌『文芸風土』について「物資不足、用紙事情の極度に悪い時に、三十六ページ程度とはいえ、詩、短歌、俳句、時には、創作までぎっしりと組み、着実な歩みを続け、部数も一千部を前後し、一時は、西日本各地の駅売りまでした。その努力は高く評価してよかろう。」と評価している。



『文芸風土』昭和24年9月号書影

小林照夫を愛情深く回想しているのが、氏原大作「浪人街」（山口県総務部文教課編『新郷土読本』一九五四〈昭和29〉年三月）で、氏原は『山口県文学』から『文芸風土』にかけての小林照夫の奮闘に触れて、群小の地方雑誌には紙の配給をしないが、文学報国会を結成すれば機関誌発行を認めて紙を配給するという県の特高課の方針に対して、「特高の要求に応じなければ紙をとりあげられる。そこで小林は自ら進んで困難な仕事を引受け、山口県文学報国会というのを結成して、山口県文学という雑誌を発行しはじめた。」と記している。

この編集者小林照夫の死去が雑誌『文芸風土』の終刊に直接繋がっている。その訃報記事では「小林照夫氏（元関日取締役）八日午前五時慢性胃腸障害で死亡、享年四十二歳、告別式は十一日午後一時から山口市下竪小路法界寺で執行、小林氏の山口県文化に残した功績は大きく、闘病中も雑誌「文芸風土」「私の中学」の編集を□（一字不鮮明）けていた」（『防長新聞』一九四九〈昭和24〉年一〇月一〇日）とその死を悼んでいる。小林照夫の死去の日付は文献によって揺れがあり、原田種夫『西日本文壇史』は一〇月七日と述べ、和田健「山口地区」（山口県教育委員会編『山口県近代文学年表』一九七二〈昭和47〉年三月）には一一月八日とあり、これを踏襲した清原万里が編んだ『山口県文学年表 年表編』（二〇〇一〈平成13〉年三月、山口県立大学附属郷土文学資料センター）でも一一月八日となっている。ここで小林照夫の死去の日付を一〇月八日と正しておきたい。

『文芸風土』と中原家のつながり
～『詩園』からつながる縁～

原　　明　子（中原中也記念館・学芸担当職員）

昭和13年9月、郷土の詩人・中原中也にあやかって創刊された詩誌『詩園』は、戦時中の言論統制の影響を受け、山口県総合誌『防長文学』になり、その後『山口県文学』と誌名を変え刊行されていたが、昭和20年の敗戦を受けて『文芸風土』と改題され、再出発をはかることになった。

『文芸風土』のもとをたどれば『詩園』に行き着くが、しかし、戦後も誌面の構成は『防長文学』、『山口県文学』の流れを組み、詩だけではなく、短歌や俳句、短編小説なども取り入れた総合文芸誌としての性格を引き継いでいる。詩の分野を見てみると、和田健、林かおるなど旧『詩園』同人も参加しているが、中原中也の顕彰を掲げていた『詩園』の面影はみられない。

しかし、誌面の記事を辿っていくと、わずかながら中原中也や中原家との意外なつながりが判明する。『文芸風土』第3巻9号（昭和21年9月）を見ると、昭和21年7月21日に「第一回詩話会」が、中也の弟である〈山口市湯田中原呉郎氏宅〉で開催され、17人が参加していることがわかる。また、3巻9号の折り込み広告や『文芸風土』第3巻第10号の別冊（昭和21年10月）には、「第二回詩話会」が10月20日に〈中原医院〉で開催される旨が告知されている。さらに、5巻2・3号（昭和23年3月）に掲載された和田健・中原呉郎・村田富久太・磯永秀雄「現代詩の問題座談会―新しい形式―終戦後の傾向―詩とリズム―風土詩壇」の座談会会場が〈中原宅〉となるなど、『文芸風土』の時代にも、中原家（中原医院）が文学的なサロンの場として機能していたことがうかがえる。

中原医院玄関

そこは本文中にも名前が出てくるとおり、中原呉郎の存在が大きいと思われる。中原中也の弟であり、『詩園』の同人だった呉郎は昭和17年、医師免許証を習得後に軍医として召集されたが、終戦後の昭和21年1月に復員。その後実家の中原医院を継ぐかたわら、詩を寄稿するなど『文芸風土』の活動にも参加している。『文芸風土』4巻4号（昭和22年7月）には〈最近、どうやら一通り、昔馴染みの詩友が揃つた。西島健一、村田富久太、永井正春の復員をトツプに、重岡静雄、中原呉郎、赤木正夫、恩地司、阿川芳雄と会えばやアと軽く言葉を交した友情圏の顔を、次々と私達は故郷に迎へた。〉（和田健「防長詩壇展望」より）と、呉郎をはじめ、村田、永井、阿川など『詩園』にかかわりのあった仲間が次々に戻ってきた様子が記されている。『詩園』が発行されていた当時、中也を目指して活動していた同人たちは中原家に集うことが多かったが、戦後もおそらく、呉郎や母・フクの協力もあり「詩話会」の会合の場となったのであろう。中也の生家で、旧『詩園』同人たちはおそらく『詩園』時代の思い出や中原中也の詩について語ったであろうし、『文芸風土』からの新たな参加者は中也の存在を詳しく知るきっかけになったことだろう。

なお、誌面では中原中也に言及した記事はわずかであるが、その中でも宗野真幌が4巻7号（昭和22年10月）に「中原中也の詩」を寄稿している。〈欲しいと思つてゐた中原中也の詩集を漸く手にすることができた。クラシックな装幀で僕の好きな創元選書の一冊として、個人の小肖（ママ）も添えてある。（略）私が驚くべき中原中也を知つたのは、いつか『詩園』に載出された「谷間の睡眠者」であった。〉と述べており、ここでも『詩園』と中原中也をつなぐ縁が垣間見える。

『文芸風土』で中也が取り上げられることは少なく、『詩園』のように表だって顕彰する流れは途切れてしまったかもしれない。しかし、このように細々ながら中原中也や『詩園』と、『文芸風土』を結ぶ細い糸を感じることができるのではないだろうか。

『文芸風土』の俳壇

髙　張　優　子（山頭火ふるさと館・学芸員）

『文芸風土』の俳壇は、前身の『山口県文学』から体制を変えて始まった。初めのうちは同人による共選が行われ、毎号選者が交代している。波田五形花は「同人共選に就て」（第2巻第11号）の中で次のように述べる。

「これは決して選者選を否定する意図からではなく、選者を得ることに困難な止むを得ざる事情と、これにはこれのよさがあることを信じて、編輯同人会の賛成を得て敢行した次第である、とかくに封建的に割拠し易い句界の沈潜をゆり動かすこともよきことに違ひない。」

その後無事に選者を得ることができたようで、途中から水田のぶほが選者となり、同人共選がなくなったタイミングで有馬草々子が選者に加わる。さらに一時は俳誌『濱』主宰の大野林火を中央から選者に招いている。

この時期の俳壇は、昭和21年11月に発表された桑原武夫による「第二芸術　現代俳句について」[①]によって大きな衝撃を受けていた。『文芸風土』俳壇においても、「第二芸術論を繞る　ホトトギスの封建制について」（白松達夫・第4巻第5号）を皮切りに、これからの俳句がどうあるべきかという議論がさかんになされていく。桑原の「第二芸術」の中では結社の封建的性格を指摘している部分があり、それについて論ずるものも多い。ここで、先に引用した五形花の一文を振り返ると、敗戦後数か月、桑原の第二芸術論のおよそ1年前にすでに「封建的」ということについて問題意識を持っていた俳人たちがいたことが分かる。

なお、当時は歌壇についても似たような状況だった。昭和21年から22年にかけて現れた「短歌否定論」と桑原の第二芸術論を受け、『文芸風土』歌壇でも活発に議論がなされている。

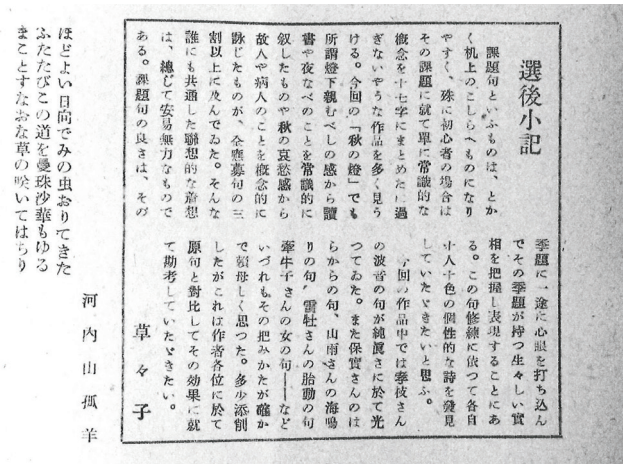
さて、毎号多数掲載されている俳句作品を見てみると、基本的にほぼ定型俳句であるが、中には西野理郎の新興俳句や新俳句人連盟作品の特集[②]のほか、河内山孤羊という人物の自由律俳句も掲載されている。

まことすなおな草の咲いてはちり（第4巻第8号）

しぐれそうなからすのないてばかり（第5巻第1号）

河内山孤羊はかつての俳号を暮羊と言い、種田山頭火が小郡（現山口市）の其中庵に住んでいた時期に親しく交流していた人物である。当時は其中庵の近くに住み、小郡農学校の教員をしていた。山頭火の日記にも名前が頻繁に登場し、また自由律俳誌『層雲』にも数度句が載っている。『文芸風土』誌上でも「定型を無視した自由律を俳句として固執する人々を私は卑怯と言うの外はない」（原文ママ）[③]　という意見もある中で、このような作品が俳句のページに掲載されていること自体注目に値するだろう。

選者こそホトトギス系である[④]が、主流とは言えない流派の作品も掲載しようという意向が伺えるのではないだろうか。



選後小記

課題句といふものは、とかく机上のこしらへものになりやすく、殊に初心者の場合はその課題に就て単に常識的な観念を十七字にまとめた」過ぎないやうな作品を多く見うける。今回の「秋の燈」でも所謂燈下親むべしの感から讀書や夜なべのことを常識的に叙したものや秋の哀愁感から故人や病人のことを感念的に詠じたものが、全應募句の三割以上に及んでゐた。そんな誰にも共通した聯想的な着想は、總じて安易無力なものである。課題句の良きは、その季題に一途に心眼を打ち込んでその季題が持つ生々しい實相を把握し表現することにある。この句修練に依つて各自寸人千色の個性的な詩を發見していたゞきたいと思ふ。

今回の作品中では奉枝さんの波音の句が純眞さに於て光つてゐた。また保實さんのはらからの句、山雨さんの海鳴りの句、雪牡さんの胎動の句、奉牛子さんの女の句――などいづれもその把みかたが確かで頼母しく思つた。多少添削したがこれは作者各位に於て原句と對比してその効果に就て勘考していたゞきたい。

草々子

ほどよい日向でみの虫おりてきた
ふたたびこの道を曼珠沙華もゆる
まことすなおな草の咲いてはちり

河内山孤羊

『文芸風土』第４巻第８号（昭和22年11月）
河内山孤羊作品掲載ページ

---

① 『世界』昭和21年11月号掲載。内容は、近代精神を盛り切れない俳句は芸術とは言えず、「第二芸術」にすぎないというもの。

② 第4巻第9号（昭和22年12月）掲載。

③ 高橋飄々子「新たな旗を」（第5巻第3号・昭和23年3月）

④ 水田のぶほは『ホトトギス』同人、有馬草々子は飯田蛇笏『雲母』に拠る。

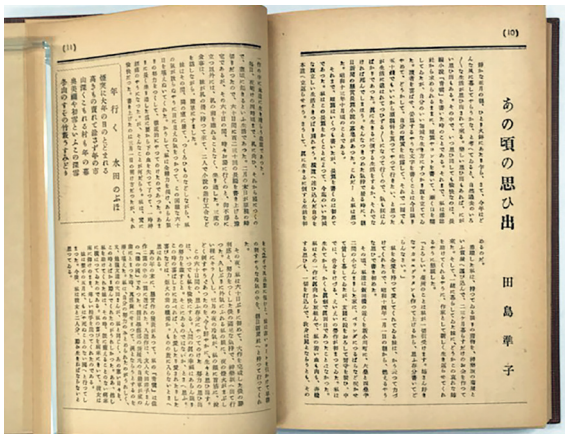
地方文芸誌研究とデジタル化技術

井　関　和　彦（山口県立山口図書館・主査）

昭和13年（1938年）9月に生まれた地方文芸誌「詩園」は、「防長文学」、「山口県文学」と誌名を変えながら刊行され続け、昭和20年（1945年）8月の敗戦を受けて「文芸風土」と改題して新たな道を歩みはじめます。敗戦直後の物資不足にもかかわらず、県内各地からの旺盛な投稿に支えられた「文芸風土」には、多くの作品が掲載された一方で、関係者の消息や訃報、追悼文なども少なからず掲載されており、地域の文学者たちについて知るための貴重な情報源となっています。

例えば、「文芸風土」4巻2号に掲載された、山口市出身の小説家・児童文学作家、田島準子による「あの頃の思ひ出」[1] は、彼女の出世作となった『青雲』が書かれた昭和13年（1938年）10月ごろのことを回想した、貴重な記録です。当時、山口から上京し、妹と同居しながら短編小説や雑文を書いて口を糊していた彼女が、一念発起して初めて長編小説に取り組み、その作品が朝日新聞の懸賞小説で佳作入選作となるまでの様子が描かれています。

田島の伝記的なことがらについては不明なことも多く、『やまぐちの文学者たち』の記述、年表[2] のほかは、まとまった研究文献は見当たりません。今後、地域文芸誌の研究が進み、細目作成が行われることで、今まで知られることのなかった地域の文学者たちの姿が少しずつ鮮明になっていくことでしょう。


あの頃の思ひ出
田島準子

田島準子「あの頃の思ひ出」（「文芸風土」4(2) p.10-11）

その意味で、昨年末にリニューアル公開された“国立国会図書館デジタルコレクション”[3] は、今後の地域文学作品の研究に欠かせないものになると考えます。国立国会図書館の膨大な電子化資料を無料で利用できる[4] このウェブサイトでは、今回のリニューアルにより、高精度な全文検索が可能になりました。キーワードを入力すると、有名・無名を問わず、文学者たちの作品、批評、消息の類が探せます。

例えば、「田島準子」の語で検索すると、多くの小説や児童文学作品などのほか、雑誌に掲載されたエッセイや、戦中に書かれた戦意高揚のためのルポなどもヒットします。伝記的なことがらについても、田島と同じ年に生まれた中本たか子が、ともに県立山口図書館の利用者で「図書館友達」だったとの記述[5] も見つかります。

紙媒体資料のデジタル化、文字の光学認識と全文検索の技術は日々進展し、より利用しやすくなってきています。図書館・文学館のレファレンスサービスや、文学をはじめとする人文科学研究の質は、今後、大きく変わっていくでしょう。もちろん、国立国会図書館は全ての日本語資料を所蔵している訳ではなく、またその所蔵資料が全て“国立国会図書館デジタルコレクション”に収録されているわけではありません。地方独自の文学・文化を守り伝え、その研究を深めていくために、図書館や文学関係機関、研究者の尽力が、今後もますます重要になってくるでしょう。

この小文は、クリエイティブ・コモンズ表示4.0ライセンス（CC-BY）で公表します。

1　文芸風土 . 1947, 4(2), p.10-11.
2　やまぐち文学回廊構想推進協議会 . やまぐちの文学者たち . 増補版 , 山口 , やまぐち文学回廊構想推進協議会 , 2013, p.88-89.
3　国立国会図書館デジタルコレクション . https://dl.ndl.go.jp/, (参照 2023-05-13).
4　国会図書館の個人利用登録を行うと、著作権の関係で通常は利用できない資料もインターネットを介して利用できるようになります。
5　女性文化人の面影 : 田島準子女史 . 女性教養 . 1954, (186), p9. 国立国会図書館デジタルコレクション .
https://dl.ndl.go.jp/pid/2735207/1/6, (参照 2023-05-13), 図書館・個人送信限定資料 .　なお、この文献には「山口市立の図書館」とあるが、県立山口図書館を指すものと思われる。
女性文化人の面影 : 中本たか子女史 . 女性教養 . 1961, (273), p7. 国立国会図書館デジタルコレクション .
https://dl.ndl.go.jp/pid/2735294/1/5, (参照 2023-05-13), 図書館・個人送信限定資料 .

寄贈図書（2023年1月～2023年6月）

大山しのぶ『夢の街』
浜崎勢津子『日常からの12章』
太田静一『続　留別抄』

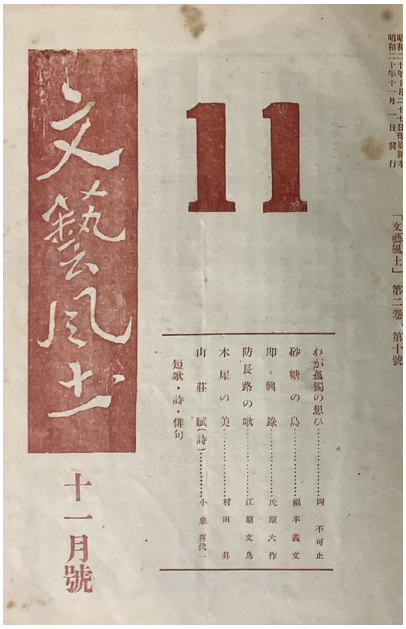
寄贈雑誌（2023年1月～2023年6月）

『其桃』第926～929号（「其桃」発行所）
『山彦』第173～176号（山彦発行所）
『ふるさと通信　きずな』第16号（ふるさと紀行編集部）
『和海藻』第38号（豊北郷土文化友の会）
『颷』第122号（颷文学会）
『文芸山口』第368～369号（山口県文芸懇話会）
『Ceratonia』第1～2号（シベリア・シリーズ研究会）
『佐波の里』第51号（防府市史談会）
『風響樹』第56号（風響樹同人）
『小宇宙』第11号（コスモス短歌会山口県支部）
『大内文化探訪』第41号（大内文化探訪会）

編集後記

今号では、『文芸風土』について、中原豊（中原中也記念館・館長）・加藤禎行（郷土文学資料センター・センター長）・原明子（中原中也記念館・学芸担当職員）・髙張優子（山頭火ふるさと館・学芸員）・井関和彦（山口県立山口図書館・主査）各氏にご寄稿いただきました。なお、これらは令和4年度受託研究「「やまぐちの文学者たち」に係る調査・研究」の成果の一部です。年2回発行のうち上半期号は、上記執筆陣で特集を組むことがつづいており、今後も各位の協力を得て、本紙のよき伝統として継続していけたらと希望しております。

今年度より、定年退職となった稲田秀雄先生に代わり、加藤禎行がセンター長に就任しました。菱岡憲司と仲村拓真もひきつづき研究員としてセンター業務に携わります。加藤センター長以下、3人の新体制となりますが、今後ともよろしくお願い申し上げます。（菱岡憲司）



『文芸風土』発刊号

山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター（〒753-8502　山口市桜畠3-2-1）
TEL.（083）928-0211　　FAX.（083）928-2251
■発行日：2023（令和5）年7月20日